

The Thirty Fifth
Sapporo Winter Cancer Seminar

第35回 札幌冬季がんセミナー

いまがんを考える2021

—ニュー・ノーマル時代におけるがん診療を考える—



日 時	2021年1月30日(土)
開催形式	WEB開催
主 催	公益財団法人札幌がんセミナー 大鵬薬品工業株式会社
後 援	日本癌治療学会 日本臨床腫瘍学会 日本がん予防学会

January 30, 2021

一 般 御 案 内

- 開催形式** WEB開催
- 事務局** 公益財団法人札幌がんセミナー
〒060-0042 札幌市中央区大通西6丁目
北海道医師会館6階
TEL：011-222-1506 FAX：011-222-1526
E-mail：scs-hk@phoenix-c.or.jp
URL：https://scsf.info
- 主催** 公益財団法人札幌がんセミナー
大鵬薬品工業株式会社
- 後援** 日本癌治療学会
日本臨床腫瘍学会
日本がん予防学会
- 登録** [https://zoom.us/meeting/register/tJAufuuqpj0iHdGvi0Mc2G9O3NaMloJEscWE](https://zoom.us/join/https://zoom.us/meeting/register/tJAufuuqpj0iHdGvi0Mc2G9O3NaMloJEscWE)から事前登録をお願い致します
- 参加料** 無料

演者の方へのお願い

口演時間は十分な討論時間をとるために、指定時間以内に終了するようにお願い致します。

第35回 札幌冬季がんセミナー

いまがんを考える2021

—ニュー・ノーマル時代におけるがん診療を考える—

日 時：2021年1月30日(土)13:00～

開催形式：WEB開催

《プログラム》

- 13:00～ 開 会 挨拶 秋田 弘俊 先生 (北海道大学大学院医学
研究院腫瘍内科学教室
教授 / (公財)札幌がん
セミナー冬季がんセ
ミナープログラム委員
長)
代表世話人挨拶 舛森 直哉 先生 (札幌医科大学医学部泌
尿器科学講座 教授)

Session I Withコロナ時代におけるがん診療

- 13:10～ 北海道の対策型がん検診の現状とwithコロナ時代への
対応
演者 松浦 邦彦 先生 (公益財団法人北海道対がん協会 釧路がん
検診センター 所長)
座長 舛森 直哉 先生 (札幌医科大学医学部泌尿器科学講座 教授)
13:30～ 質疑
- 13:40～ Withコロナのがん放射線治療
演者 中村 聡明 先生 (関西医科大学病院放射線治療科 准教授)
座長 青山 英史 先生 (北海道大学大学院医学研究院放射線治療学
教室 教授)
- 14:00～ 質疑
- 14:10～ 病院に必要とされる対策と課題 ～院内クラスター発生
を経験して～
演者 高橋 将人 先生 (独立行政法人国立病院機構 北海道がんセ
ンター 副院長)
座長 本間 明宏 先生 (北海道大学大学院医学研究院耳鼻咽喉科・頭
頸部外科学教室 教授)
- 14:30～ 質疑
14:40～ 休憩 (10分)

Session II 医療安全の観点からみたがん治療を考える

- 14：50～ インフォームド・コンセントにおける看護師の役割
演者 佐々木純子 先生 (札幌医科大学附属病院医療安全部 副部長)
座長 武富 紹信 先生 (北海道大学大学院医学研究院消化器外科学
教室 I 教授)
- 15：10～ 質疑
- 15：20～ 患者の意思が尊重されたDNAR指示を目指した当院の
取り組み
演者 橋本 暁佳 先生 (札幌医科大学医学部病院管理学 兼 循環
器・腎臓・代謝内分泌内科学講座 准教授)
座長 辻 靖 先生 (国家公務員共済組合連合会 斗南病院腫瘍
内科 診療部長)
- 15：40～ 質疑
-

基調講演 1

- 15：50～ がんと医療安全 ～「医療事故調査制度」開始5年の経験
から～
演者 木村 壯介 先生 (一般社団法人日本医療安全調査機構 常務
理事)
座長 田中 伸哉 先生 (北海道大学大学院医学研究院腫瘍病理学教
室 教授)
- 16：15～ 質疑
- 16：30～ 休憩 (10分)
-

Session III がん診療の新たな取り組み

- 16：40～ がん患者の感染症診療
演者 大曲 貴夫 先生 (国立研究開発法人 国立国際医療研究セン
ター病院国際感染症センター センター長)
座長 豊嶋 崇徳 先生 (北海道大学大学院医学研究院血液内科学教
室 教授)
- 17：00～ 質疑
-

基調講演 2

- 17：10～ がんの原因としての感染症
演者 津金昌一郎 先生 (国立研究開発法人国立がん研究センター社
会と健康研究センター センター長)
座長 秋田 弘俊 先生 (北海道大学病院 病院長/同大学大学院医
学研究院腫瘍内科学教室 教授)
- 17：35～ 質疑
-
- 17：50～ 閉会挨拶 豊嶋 崇徳 先生 (北海道大学大学院医学研究院
血液内科学教室 教授)

北海道の対策型がん検診の現状と withコロナ時代への対応

Organized cancer screening in Hokkaido and mass screening
in “With Corona” era

松浦 邦彦

Kunihiko MATSUURA

公益財団法人 北海道対がん協会 釧路がん検診センター 所長
Kushiro Cancer Detection Center of Hokkaido Cancer Society

日本で行われているがん検診には、ある集団全体の死亡率を減らす目的で行われる「対策型検診」、個人が自分の死亡リスクを下げるために受ける「任意型検診」の2種類があります。現在、市区町村が健康増進法に基づく健康増進事業として行っている住民検診は対策型検診であり、死亡率減少効果が示されているだけではなく、受診者の不利益が最小になるような検診方法が基本となっています。さらに、厚労省から「がん予防重点健康教育およびがん検診実施のための指針（平成28年2月4日一部改正）」が通知され、胃がん、子宮頸がん、肺がん、乳がん、大腸がんの5がんについて、正しい検診を正しく行うことが求められています。

一方、北海道における対策型検診は老人保健法が昭和58年に施行される以前から全国に先駆けて開始され、昭和38年に胃がん検診、同41年に子宮頸がん検診、同48年に乳がん検診、同51年に肺がん検診が始まり、大腸がん検診もやや遅れて同62年に開始されています。しかし、がん検診の受診率は2019年国民生活基礎調査によると胃がん検診で34.0%（43位、全国39.0%）、子宮がん検診30.7%（45位、全国35.8%）、乳がん検診30.1%（45位、全国37.4%）、肺がん検診37.8%（47位、全国45.8%）、大腸がん検診34.6%（44位、全国41.2%）と低迷し、厚労省が提唱する受診率50%の目標にはほど遠いのが現状です。

そのような状況の中、令和2年には年明けから新型コロナウイルス感染症拡大の嵐が日本中を吹き荒れました。マスク着用の上で三密を避けることが求められ、換気と手指消毒の徹底が叫ばれましたが、感染拡大はなかなか収束しません。当然、がん検診の現場では狭い会場に多くの受診者の来場があって混雑が予想されたため、ほとんどの市町村で検診事業自体が中止、延期となりました。しかし、令和2年5月26日には厚労省から「健康診査実施機関における新型コロナウイルス感染症対策について」が通知され、十分な感染対策を実施した上での事業再開が可能となっています。

そこで今回は、北海道における対策型がん検診の実施状況を報告し、さらに現在、検診現場で行っているコロナ感染症対策と、今後のwithコロナ時代におけるがん検診のあり方について述べたいと思います。

松浦 邦彦（まつうら くにひこ）

略歴

- 昭和60年3月 札幌医科大学卒業
昭和60年4月 札幌医科大学 第4内科研
究生
札幌医大第4内科、東札幌
病院、小樽掖済会病院等で
研修
平成4年10月 学位（医学博士）取得
平成5年1月 釧路がん検診センター副所長に就任
平成7年10月 釧路がん検診センター所長に就任



役職

- 日本消化器がん検診学会 理事、指導医
日本消化器がん検診学会 北海道支部長
公益財団法人 北海道対がん協会 理事

Withコロナのがん放射線治療

Cancer radiotherapy during COVID-19 era

中村 聡明
Satoaki NAKAMURA

関西医科大学病院放射線治療科 准教授
Division of Radiation Oncology, Kansai Medical University Hospital

新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) 感染症 (COVID-19) による全世界パンデミックにて、我が国のがん放射線治療も大きな影響を受けることとなった。がん放射線治療は、開始すれば連続した数週間の治療期間が必要で、長期の治療休止は治療成績の低下に直結することが知られている。また外科治療・薬物治療と異なり、外来患者と入院患者を同一エリアで治療しており、感染蔓延期には両者のゾーニング (時間的・空間的) も必要となる。このように放射線治療特有の注意点に配慮しながら、Withコロナのがん医療を行う必要がある。

日本放射線腫瘍学会 (JASTRO) では、4月の緊急事態宣言発令を一つの契機として、「COVID-19対策アドホック委員会/コロナ対策実行グループ」を立ち上げ、放射線治療に関するCOVID-19情報をWEB中心に発信してきた。活動の成果は「COVID-19パンデミックにおける放射線治療 JASTRO提言」として一般公開している。

この提言では、低リスクの前立腺がんや乳がんなどでは放射線治療の省略または延期を考慮可能な場合があること、放射線治療を行う場合でも5～7回照射などの寡分割照射の選択肢がありうること、また、頭頸部がん、食道がんや肺がんなどにおいても術後照射を中心に延期可能な場合があることを、具体的な総線量や分割回数とともに提示している。

演者は「コロナ対策実行グループ」のグループリーダーとしてこれら活動に関与してきた。セミナーではJASTRO COVID-19対策活動を中心にWithコロナのがん放射線治療を論じてゆきたい。

中村 聡明 (なかむら さとあき)



略歴

- 平成8年 神戸大学医学部医学科卒業
平成8年 大阪大学医学部附属病院 研修医 (放射線科)
平成9年 公立学校共済組合近畿中央病院 医員 (放射線科)
平成10年 大阪大学大学院医学系研究科 (放射線治療学専攻) 入学
平成14年 同修了 医学博士
平成14年 シカゴ大学 博士研究員 (放射線腫瘍科)
平成17年 大阪大学大学院医学系研究科 助手 (放射線治療学講座)
平成19年 大阪府立成人病センター 診療主任 (放射線治療科)
平成24年 大阪府立急性期・総合医療センター 副部長 (放射線治療科)
平成24年 京都府立医科大学大学院 特任講師 (放射線診断治療学講座)
平成27年 関西医科大学 講師 (放射線科学講座)
平成28年 同 准教授 (放射線科学講座)

役職・資格

- 日本医学放射線学会 放射線治療専門医、指導医
日本放射線腫瘍学会 代議員
日本放射線腫瘍学会 放射線治療計画ガイドライン 改訂委員
日本放射線科専門医会・医会 理事
日本頭頸部癌学会 代議員
日本膵臓学会 診療ガイドライン委員会 改訂委員
膵癌術前治療研究会 世話人
日本小児がん臨床研究グループ 放射線療法委員会 委員

受賞

- 平成18年 米国放射線腫瘍学会 Top10 Most Viewed Abstracts
平成19年 日本放射線腫瘍学会 優秀教育講演者賞
平成22年 欧州放射線腫瘍学会 Best Poster Awards
平成27年 日本放射線腫瘍学会 優秀教育講演者賞
平成28-30年 関西医科大学 教員評価優秀者
令和1年 関西医科大学 教育奨励賞

病院に必要とされる対策と課題 ～院内クラスター発生を経験して～

Hospital Preparedness for COVID-19:

From the experience of the outbreak in a cancer specialized hospital

高橋 将人

Masato TAKAHASHI

独立行政法人国立病院機構 北海道がんセンター 副院長
NHO Hokkaido Cancer Center

新型コロナウイルス感染が猛威を振るっている。今回の第35回札幌冬季がんセミナー開催時には沈静化していることを願っているが、開催当日でもこの感染症への対策がまだ必要とされているのではないだろうか。

当院は北海道の総合病院の中でも今回のコロナ禍の早い時期に院内クラスター発生を経験した。がん診療を専門とする病院として、医療関係者や一般の市民にも大変なご心配をおかけし猛省している。当時の状況を振り返り、何が問題であったのかを検証し、その後どのような対策をおこなってきたのかについて報告する。

2020年4月中旬消化器内科病棟で複数の看護師と患者の発熱から院内クラスター発生が判明した。制限されたPCR検査の数から翌日、翌々日の検査優先順位を考えながら、平行して幹部と感染対策室で患者および職員の安全を第一に対策を考えた。病院機能の完全に復帰はより慎重に考え、最後の感染陽性者が判明した1ヶ月後、クラスター発生2ヶ月後に感染収束宣言を出した。

感染陽性者はもちろんのこと直接院内感染に関わった病棟の職員に多くの休務者を出した。PPE対応なども以前に院内研修で行ってきたが、多人数のコロナ感染陽性者を診療することは想定してはおらず、他病棟から感染病棟への診療応援などほぼ全職員に大きな精神的な負担を強いることになった。複数の職員に心理カウンセリングなどが必要であった。

病院機能を維持するために外来、入院、手術、職員の4つのタスクフォースを立ち上げ、病院の導線の整理、入院患者全員のPCRおよびCT検査、病床数制限、面会および外泊禁止、看護師の休憩室増設などの対策をおこなった。その後立ち上げたBCPタスクフォースで再度感染が起きた場合の診療継続方法を規定した。

院内クラスターを経験して、病院幹部だけでなく、すべての職員に感染症に対するの考え方が今までとは大きく変化した。一方面会や外泊の禁止、多職種が関わる診療の制限など、マイナスとなった面も否定できない。今回の我々の報告が、何かしらのお役立ちになれば幸いである。

高橋 将人（たかはし まさと）

略歴

- 1989年 3月 旭川医科大学医学部卒業
1998年 3月 北海道大学大学院医学研究科
博士課程修了
- 1989年 4月 北海道大学病院研修医
1990年 6月 北海道大学複数の関連病院に
て研修
- 1998年 4月 千葉県がんセンターリサーチレジデント
2002年 4月 北海道大学病院第1外科医員
2004年10月 北海道大学病院第1外科助教
2010年 4月 北海道がんセンター乳腺外科医長
2013年 4月 北海道がんセンター統括診療部長
2017年 8月 北海道がんセンター副院長



資格

- 日本外科学会指導医 専門医
日本乳癌学会指導医 乳腺専門医
日本臨床腫瘍学会 協議員
日本遺伝性腫瘍学会指導医 専門医
北海道がん診療連携協議会がん登録部会長

受賞

- 2004年 日本乳癌学会研究奨励賞
2015年 北海道外科学会賞

インフォームド・コンセントにおける看護師の役割

Nurses' role in the procedure for obtaining informed consent

佐々木 純子
Junko SASAKI

札幌医科大学附属病院 医療安全部 副部長
Sapporo Medical University Hospital

全国に医療安全活動が展開され始めた2000年頃、多くの医療機関にとってインフォームド・コンセントを正しく理解し実践することが最優先課題だった。今日もなお、その重要性は変わっていない。なぜなら、インフォームド・コンセントは、それ自体が医療の安全と質に寄与するだけでなく、患者と医療者との信頼関係の構築に直結するからである。

当院では、2020年に「インフォームド・コンセントにおける基本方針」を改訂し、看護師同席の課題解決のために全病院的に業務改善計画として取り組んでいる。説明日時の事前調整の実施、看護師の同席率のモニタリング、全病棟への実態調査アンケート、カルテレビュー等を実施している。

日本看護協会は、看護職の倫理的課題の概要として、「インフォームド・コンセントとは、患者・家族が病状や治療について十分に理解し、また、医療職も患者・家族の意向や様々な状況や説明内容をどのように受け止めたか、どのような医療を選択するか、患者・家族、医療職、ソーシャルワーカーやケアマネジャーなど関係者と互いに情報共有し、皆で合意するプロセスである。」と述べている。医師が、ただ単に病状を告げ、同意書をとることではない。日常の場面においても、患者と医療職は十分に話し合っ、どのようなケアを行うか決定する必要がある。しかし、倫理的課題として、インフォームド・コンセントにおいて、患者・家族が医療職から説明された内容を十分に理解できていない、医療職が患者・家族の権利を尊重できていないことなどで、十分な合意形成ができないまま、医療が提供されることがある。そのようなとき、患者・家族が、病状説明の内容が腑に落ちない、医療職に対して不信感を抱くなどの問題が生じ、時折、医療安全担当者へ相談がある。

インフォームド・コンセントにおいて必要とされる看護職の役割は、患者が十分に理解した上で医療を選択し決定できるような十分な情報を丁寧に伝えることと同時に、患者・家族の権利を尊重するために積極的に働きかける権利擁護（代弁者、弁護、相談窓口）である。患者・家族等が聞きたいと思っている情報を十分に聞くことができ、患者と医療職双方が納得した意思決定になるように支援・調整している看護職の姿に期待したい。

佐々木 純子（ささき じゅんこ）

略歴

1983年 札幌医科大学附属病院入職
1992年 副看護師長 小児科 ICU
2006年 看護師長 第一外科
2011年 看護部副部長
2015年 医療安全部副部長



認定資格

2013年 日本看護協会認定看護管理者

所属学会

日本看護管理学会
医療の質・安全学会

活動

北海道看護協会 医療事故調査支援委員会委員長

患者の意思が尊重されたDNAR指示を目指した 当院の取り組み

Our challenges for standardization of DNAR orders based
on patient's decision

橋本 晁佳

Akiyoshi HASHIMOTO

札幌医科大学附属病院 病院管理学

兼 循環器・腎臓・代謝内分泌内科学講座 准教授

Sapporo Medical University Hospital,

Division of Health Care Administration and Management

DNARすなわちDo not attempt resuscitation指示は、悪性腫瘍の末期など、心肺蘇生の適応がない患者が尊厳を保ちながら死にゆく権利を守るために「心停止時に心肺蘇生を行わないように」とするための指示である。DNAR指示は心停止時にのみ有効であり、DNAR指示によって心肺蘇生以外の治療を差し控えることはあってはならない。しかし、臨床の現場では、DNAR指示は治療をやめていいという指示だとの誤解により、非蘇生行為の終了・減量・差し控え、あるいは鎮痛・鎮静薬の差し控えすら行われている。DNAR指示で非蘇生治療が差し控えられてしまう理由は、DNAR指示と終末期医療が混同されていることにある。終末期医療には、治療の不開始、差し控え、中止に関わる合意形成のプロセスが別個に必要である。一方、DNAR指示に関わる合意形成は終末期医療に関するガイドラインに準じて行われる。患者が終末期であるという判断やその後の対応は主治医個人ではなく、主治医を含む複数科の医師と看護師らとからなる医療チームの総意であることが重要であり、妥当性を患者と医療・ケアチームが繰り返して話し合い評価されるべきである。この医療チームの立ち上げが重要なのは、医学的見地の検討だけでなく、患者本人の意思を正確に把握するためにも不可欠なプロセスだからである。本来的に、DNAR指示は、絶対的に予後不良と判断された患者が救命の見込みのない儀式的な心肺蘇生を望まないという、患者本人の意思の確認を根拠に発生するものである。本人の意思確認のプロセスには、当然本人が意思決定能力を有しているか否かの判断も含まれるから、患者や家族の様々な事情や社会的背景をよく理解している関係者が参加することが望ましい。そして、本人の意思の確認が困難な場合には、家族と医療チームによって、意思を推定したり患者にとっての最善の利益とは何か、を話し合わなければならない状況も生じる。以上のプロセスを標準化し疎漏なく適切に施行できるよう、当院では臨床倫理委員会と医療安全部が中心となって、「DNAR同意取得のプロセスシート」を作成した。運用後の成果と現在の問題点について提示し、この問題に対する議論が深められることを期待している。

橋本 暁佳（はしもと あきよし）



略歴

- 平成1年3月 札幌医科大学医学部卒業
平成1年4月 札幌医科大学附属病院にて
実地修練
平成2年7月 函館五稜郭病院 循環器内
科
平成3年7月 札幌医科大学 内科学第二
講座 研究生
平成4年6月 市立室蘭総合病院 循環器科
平成5年6月 札幌医科大学 内科学第二講座 研究生
平成8年1月 医学博士学位取得
平成8年11月 マサチューセッツ総合病院 放射線科 研究員
平成10年12月 函館五稜郭病院 循環器科
平成11年7月 札幌医科大学 内科学第二講座 研究生
平成12年7月 札幌医科大学 内科学第二講座 助手
平成19年4月 札幌医科大学 内科学第二講座 講師
平成24年4月 札幌医科大学附属病院 医療安全推進部 副部長
(兼任)
平成24年11月 札幌医科大学 内科学第二講座 准教授
平成25年4月 札幌医科大学 循環器・腎臓・代謝内分泌内科学講
座 准教授
平成26年10月 札幌医科大学 病院管理学 兼 循環器・腎臓・代
謝内分泌内科学講座 准教授
札幌医科大学附属病院 医療安全部 副部長(専従)
～現在に至る

所属学会・資格

- 日本内科学会（総合内科専門医）
日本循環器学会（専門医）
日本心臓病学会（代議員、特別正会員）
日本核医学会（専門医）
日本心臓核医学会（幹事）
日本肺高血圧・肺循環学会（評議員）
日本心臓リハビリテーション学会（評議員、指導士）
医療の質・安全学会

がんと医療安全
～「医療事故調査制度」開始5年の経験から～
Medical safety with cancer patient
～From 5 years experiences of 『Medical Accident
Investigation System』～

木村 壯介
Sosuke KIMURA

一般社団法人日本医療安全調査機構 常務理事
Executive Director, Japan Medical Safety Research Organization

1999年の医療事故多発が引き金となり、診療に起因する予期していなかった事故にどのように対応すべきか、あるべき法制度は何かについて20年近くにわたり、提言、試案が議論された結果「医療事故調査制度」が医療法の下に施行されるに至りました。制度開始5年が経ち、本制度の運営が託されております日本医療安全調査機構での経験を基に、がんとの関連に注目し報告致します。

本制度で定義する「医療事故」の対象は、「提供した医療に起因する予期しなかった死亡」となっていることから、「がん」が直接対象となることは基本的にありません(原病の進行に当てはまる)。しかし、検査結果の確認が遅れ死期を早めた、あるいは、全身状態・血算凝固系の低下・増悪が判明している状況下での、検査・処置等、がんが直接ではないが原死因ともいえる事例の報告は、担がん状態の高齢者が増加する中で、目立つ存在に成りつつあります。

短時間で全身の詳細な画像情報が得られるCT、MRI等の発達は、その情報を利用する担当医の注意、診療科チーム体制、及び電子カルテシステムでは完全に対応できているとはいえ、対象臓器だけでなく、たまたま見つかる「Incidental findings」まで含めると、熱心に対応されている大学病院等でも、見落とし「0」は困難だと聞いています。

複数の疾患を抱える患者の多い高齢者社会の中で、抗凝固薬の服用、あるいはがんによる凝固機能の低下状態にある患者が増えています。自らの担当領域・疾患のみを念頭に安易な生検、カテーテル留置等に係わる穿刺による出血では、重篤な結果にいたる例が見られます。自らが関与する領域・疾患だけでなく広い医学的見地から、患者を取り巻く他領域の担当とも1つの医療チームとして対応することが求められています。

同様の観点から、がんと直接関係しない領域の治療において、患者の生命予後、Performance Status等も充分念頭に置き、不要な痛み・負担、あるいは期待される予後等に関し、関係する医療者間での情報共有を充分に行うことの重要性が問われています。

木村 壯介（きむら そうすけ）



略歴

- 1972年 東京大学医学部卒
1972年06月01日 東京大学医学部付属病院
外科系研修医【1年間の
み】
1973年06月01日 三井記念病院外科医員
【4年間】
1977年12月01日 自治医科大学胸部外科助
手【自治医科大学胸部外科10年間】
1978年10月01日 自治医科大学講師
1987年12月01日 埼玉医科大学第一外科助教授【埼玉医科大学8年
間】
1994年11月01日 埼玉医科大学教授
1995年01月01日 国立国際医療センター第二病棟部長
2008年04月01日 国立国際医療センター病院長
2013年09月30日 独立行政法人国立国際医療研究センター病院長退任
【医療センター18年間、最後の5年半を院長】
2013年10月01日 日本医療安全調査機構専務理事（中央事務局長）
現在に至る。（現在は、常務理事）

専門領域

- 大動脈の外科、心臓外科（成人）
重症心不全に対する循環補助
大動脈解離の外科治療

学会等：

- 胸部外科学会、心臓血管外科学会、他
心臓血管外科名誉専門医

その他

- 日本病院会 2008年より、日本病院会「医療の安全確保推進委員会」
委員長として医療事故死因究明制度の制定に係る
国立国際医療研究センター病院 名誉院長
日本専門医機構 理事
医療安全全国共同行動 理事

がん患者の感染症診療

Infectious Disease Care for Cancer Patients

大曲 貴夫

Norio OHMAGARI

国立国際医療研究センター病院国際感染症センター センター長
Disease Control and Prevention Center,
National Center for Global Health and Medicine

がん患者の感染症は難解でわかりにくいとの印象を持たれることが多い。がん患者の特殊性を踏まえつつ感染症診療の原則を適用していけば、適切なマネジメントを行うことができる。

まずは患者の背景が重要である。がん患者は原疾患による免疫不全・手術侵襲・治療用デバイスの存在・抗がん剤治療や放射線治療により感染症を発症しやすい。これらの背景の違いが患者における感染症の発症様式を規定する。次にはどの臓器に問題が起こっているかを詰める。易感染状態にある患者では、問題臓器が絞りにくいが、一方で微妙な症状や身体所見が唯一の異常所見であることも多い。「この程度の症状・所見だから大丈夫」、と甘く見てはいけない。

次は「どの微生物が問題になっているか」を考える。感染症治療開始点は、病原微生物が同定されていない場合が多い。そこでターゲットして推測される微生物を的確に推測して、有効な抗菌薬を選択する。ここでターゲットとなった特定の臓器の特定の微生物による感染症に対して、第一選択薬を用いる治療法がDefinite Therapyである。当然ながらこのためには検体提出による微生物の同定が必須である。易感染状態にある患者においては治療の効果判定およびフォローにおいても注意点が存在する。がん患者は輸血や腫瘍の影響（腫瘍熱）など様々な原因で発熱するため、熱の有無のみをみては経過観察に難渋する。このような状況で頼れるのは、患者の臓器の異常を示す数々のマーカーである。それは各臓器に特異的な症状であり、身体所見であり、検査所見である。つまりはベッドサイドで得られる情報である。

当日はがん患者とCOVID-19との関連についても、現在の知見を紹介したい。

大曲 貴夫（おおまがり のりお）

略歴

佐賀医大医学部卒業。聖路加国際病院内科レジデント

2002年 テキサス大学ヒューストン校
内科感染症科クリニカルフェ
ロー

2004年 静岡県立静岡がんセンター感
染症科医長

2007年 同部長

2011年 国立国際医療研究センター国際疾病センター副セン
ター長

2012年 同院国際感染症センター長

2017年4月 国立国際医療研究センター病院AMR臨床リファレン
スセンター長（兼任）。

現在 国立国際医療研究センター 理事長特任補佐／国際感
染症センター長／DCC科長／感染症内科医長併任



がんの原因としての感染症

Infectious Causes of Cancer

津金 昌一郎

Shoichiro TSUGANE

国立がん研究センター社会と健康研究センター センター長

Center for Public Health Sciences, National Cancer Center

がん死亡の原因としての感染症の寄与割合について、米国においては5%と推計されている一方、日本人においては22%を占めると推計されている。概して、欧米では小さいが、アジアなどで大きい。世界で1995年に罹患したがん900万例の内の160万例（18%）が感染に関連したがんとの推計もある。

国際がん研究機関（IARC）が、人における十分なエビデンスに基づいて発がん性があると判定している細菌・ウィルス（がんの部位）は、B型肝炎ウィルス（肝細胞がん）、C型肝炎ウィルス（肝細胞がん、非ホジキンリンパ腫）、ヒトパピローマウイルス16型（子宮頸部、外陰、膺、ペニス、肛門、口腔、中咽頭、扁桃のがん）、ヒトT細胞白血病ウィルス1型（成人T細胞性白血病・リンパ腫）、ヘリコバクター・ピロリ菌（非噴門部胃がん、胃MALTリンパ腫）、EBウィルス（鼻咽頭がん、リンパ腫など）などが挙げられる。日本においては、ヘリコバクター・ピロリ菌による胃がん、肝炎ウィルスによる肝がん、ヒトパピローマウイルスによる子宮頸がんなどが大きな割合を占める。

感染に起因するがんは、その感染予防と治療により予防可能である。衛生環境や食習慣の改善、近年では除菌によりもたらされたピロリ菌感染者の減少は胃がんの減少を、また、医療現場などにおける肝炎ウィルス感染予防の徹底や有効な治療薬の開発と普及は肝がんの減少をもたらし、日本人の年齢調整罹患率・死亡率の着実な減少に大きく貢献している。そして、ヒトパピローマウイルスに対するワクチン開発による感染予防が普及した結果として、世界においては、子宮頸がん罹患率の減少が観察されるようになった。一方、日本においてはワクチン接種の普及が進まない現状において、近年では、若い世代の子宮頸がん罹患率が増加傾向にある。

感染という原因が明らかながんは予防可能であり、その着実な対策が重要である。

津金 昌一郎 (つがね しょういちろう)



略歴

- 1981年 8月 慶應義塾大学医学部卒業
1995年 8月 慶應義塾大学院医学研究科
修了
1985年 9月 慶應義塾大学医学部助手
(衛生学公衆衛生学教室)
1986年 4月 国立がんセンター研究所疫
学部研究員 (疫学部疫学研究室)
1988年 4月 国立がんセンター研究所室長 (疫学部疫学研究室)
1992年～93年 ハーバード大学公衆衛生大学院訪問研究員 (疫学、
栄養学部門)
1994年10月 国立がんセンター研究所支所部長 (臨床疫学研究部)
2003年10月 国立がんセンターがん予防・検診研究センター部長
(予防研究部)
2013年 4月 国立がん研究センターがん予防・検診研究センター長
2016年 1月 国立がん研究センター社会と健康研究センター長

受賞

- 2010年度 朝日がん大賞
2014年度 高松宮妃癌研究基金学術賞
2018年度 日本医師会医学賞
など

研究領域

- がんなど生活習慣病の疫学研究 (原因解明と予防法開発に関する研究)
南米日系移民の人類生態学・疫学研究
など

— MEMO —

— MEMO —

～第34回札幌冬季がんセミナースナップ写真～

2020年1月25日





札幌冬季がんセミナーの35年 演者一覧表

演 者	所 属	演 題	座 長
第1回 1987年2月4-5日 白血病細胞の生物医学的特性とその制御		代表世話人：宮崎 保	
Dr. Hapel Dr. Cheever 武蔵 学 高橋 清	Australian National Univ. Univ. of Washington 北海道大学 岡山大学	Morning Lecture Morning Lecture ヒト好塩基球コロニー 慢性骨髄性白血病における好塩基球 の形態並びに機能に関する検討	〔 木村 郁郎 北村 幸彦
中畑 龍俊 森山 美昭	信州大学 新潟大学	Mast cell, basophilの増殖と分化 特別発言：CMLにおける basophil臨床的意義	
高後 裕	札幌医科大学	Expression of transferrin receptors in leukemic cells	〔 高月 清 漆崎 一郎
桜田 恵右 岡部 哲郎 内山 卓 浅野 茂隆 谷口 維紹	北海道大学 東京大学 京都大学 東京大学・医科研 大阪大学	白血病細胞増殖とProtein kinase 白血病細胞自己増殖因子の構造と機能 T細胞腫瘍におけるIL-2受容体発現 特別発言：hG-CSFの作用機序 特別発言：IL-2システムとT 細胞の悪性増殖機構	
平井 久丸 及川 恒之	東京大学 北海道大学	白血病およびMDSにおける癌遺伝子 マウス形質細胞腫の染色体変 化とc-myc発現異常	〔 高久 史麿 佐々木本道
澤田 博義 吉田 勉弘 鎌田 七男 桜井 雅温 岡部 実裕	京都大学 北海道大学 広島大学 埼玉がんセンター 北海道大学	Ph ¹ 陽性急性白血物のbcr再構成と病像 オンコジンの染色体マッピング Ph ¹ 染色体とabl遺伝子 白血病の染色体異常と病型・予後 特別発言：Ph ¹ 陽性ALLにおけるbcr 再構成およびbcr, c-abl遺伝子の発現 特別発言：系統逸脱急性白血病について 特別発言：造血器悪性腫瘍由来樹立 株細胞でみられる染色体の再構成 —oncogeneの局在との関連で—	
小池 正 原田 実根 小寺 良尚	新潟大学 金沢大学 名古屋第一赤十字病院	白血病に対する同種骨髄移植療法の実験 自家骨髄移植 白血病における同種骨髄移植 の成績と将来の課題	〔 永井 清保 宮崎 保
原 宏 今村 雅寛	兵庫医科大学 北海道大学	骨髄移植の成果と問題点 特別発言：骨髄移植の免疫生物学	
Dr. Paciucci 泉二登志子	The City Univ. of New York 東京女子医科大学	Morning Lecture 組換え型コロニー形成刺激因子 の白血病性幹細胞に与える影響	〔 溝口 秀昭 仁保 喜之
北野 喜良	自治医科大学	ヒト白血病細胞の造血因子感 受性とクローン性増殖の検討	
堀田 知光	名古屋大学	白血病性前駆細胞のin vitro における分化・増殖動態	
浅野 嘉延 平嶋 邦猛	九州大学 埼玉医科大学	ヒト白血病細胞の増殖・分化 特別発言：骨髄性白血病病態 の実験動物モデルによる検討	

演 者	所 属	演 題	座 長
藤井 義博 上田 孝典 森岡 正信 大野 竜三 宇塚 善郎 野村 武夫	北海道大学 福井医科大学 北海道大学 名古屋大学 东北大学 日本医科大学	ラット骨髄単球性白血病の分化誘導による制御 作用機序よりみた抗腫瘍剤の効果増強の試み 成人急性リンパ性白血病の臨床病態と治療成績 成人AMLの化学療法—BHAC-DMP(I)、BHAC-DMP(II)並びにM85プロトコールによる— 特別発言：成人急性非リンパ性白血病に対するIntensive Postremission Therapy 特別発言：急性白血病の化学療法：20年を省みて	小林 博 山田 一正
浦野 順文 大西 義久 小峰 光博 吉田弥太郎 竹森 信男	東京大学 新潟大学 群馬大学 京都大学 北海道大学	不応性貧血の病理 病理学からみたMDS MDSとその臨床 MDSの臨床的ならびに生物学的特徴 特別発言：MDSおよびerythroleukemiaにおける赤血球系細胞の超微形態—免疫電顕的研究—	内野 治人 柴田 昭
岩永未知代 三輪 啓志 池田 柊一 服部 俊夫 淀井 淳司 下山 正徳 松元 實 木村禮代二	北海道大学 三重大学 長崎大学 熊本大学 京都大学 国立がんセンター 鹿児島大学 名古屋記念病院	北海道におけるHTLV-Iの感染動態 HTLV-I 感染樹立細胞株の免疫学的分子生物学的検討 HTLV-I キャリアーにおけるHTLV-I 関連マーカーの多様性 ATL細胞におけるT3-Ti複合体の発現異常 ATLにおけるIL-2レセプターおよびCD23(Fcεレセプター、B細胞活性化抗原)の持続発現について 特別発言：HTLV陰性の成人T細胞性白血病 特別発言：Etoposide-containing combination chemotherapy (OPEC) for adult T-cell leukemia/lymphoma 総括	市丸 道人 大里外吾郎
第2回 1988年2月3-5日 肝癌の生物学的特性とその制圧		代表世話人：内野 純一	
黒石 哲生 平山 雄 戸部 隆吉	愛知県がんセンター 予防がん学研究所 京都大学	日本における肝癌死亡率の動向 原発性肝癌の危険因子 とくに喫煙・飲酒複合の意義について 原発性肝癌の追跡調査—日本肝癌研究会—	森 武貞
伊東 信行 武市 紀年 谷口 直之 小林 健一 三田村圭二 宮木美知子	名古屋市立大学 北海道大学・癌研究施設 大阪大学 金沢大学 東京大学・医科学研究所 東京都臨床医学総合研究所	肝発癌物質と動物モデル LECラットにおける肝癌発症機構：病理 LECラットの肝癌発症の生化学的機構 HEPADNA ウィルス—とくにWood chuck Hepatitis virus— HBV DNAの肝癌細胞及び肝細胞への取り込み 肝癌に関連した癌遺伝子	服部 信

演 者	所 属	演 題	座 長
谷川 久一 太田 五六 森 道夫 佐々木憲一 中島 敏郎 佐藤 春郎	久留米大学 石川県立中央病院 札幌医科大学 東邦大学 古賀病院附属研究所 福島労災病院	肝細胞癌の発育と自然経過 肝硬変より肝癌へ、その形態学的研究 遠位的マーカーによる前癌病変の解析 肝細胞癌の血管構築 肝癌の発育様式—門脈内転移・多発肝癌 特別発言	奥平 雅彦
篠原 正裕 打田日出夫 青柳 豊 大藤 正雄 平井 秀松	北海道大学 奈良県立医科大学 新潟大学 千葉大学 腫瘍研究所	超音波診断 CTと血管造影 AFP亜種 早期診断体系 特別発言	市田 文弘
C. Couinaud 野口 孝 長谷川 博 岡本 英三 C. Couinaud 池田 恵一 内野 純一 小沢 和恵 杉浦 光雄 岩月舜三郎 水戸 迪郎	パリ大学 三重大学 国立がんセンター 兵庫医科大学 パリ大学 九州大学 北海道大学 京都大学 順天堂大学 Pittsburg大学 旭川医科大学	肝区域と肝切除 肝予備能と肝切除限界 肝切除の手法と術前術後管理 系統的肝切除 SⅧ切除 肝芽腫の特性と治療 小肝癌の切除療法 進行肝癌に対する治療 食道静脈瘤合併肝癌の治療 肝癌に対する肝移植 特別発言	菅原 克彦
山本 政勝 山田 龍作 高木 弘 阿岸 鉄三 山本 祐夫	関西医科大学 和歌山県立医科大学 名古屋大学 東京女子医科大学 大阪社会医療センター	肝癌と栄養 肝動脈塞栓療法 肝癌の化学療法—動注療法を中心として— 肝癌に対する温熱化学療法 小柴胡湯による肝硬変患者からの肝癌発症予防の試み	森岡 恭彦
X. D. Zhou 岩月舜三郎	上海大学・肝癌研究所 Pittsburg大学	中国の肝癌と治療 米国における肝癌と予後	小林 博
第3回 1989年2月2—4日		代表世話人：鈴木 明	
肺癌と縦隔腫瘍をめぐって			
小野 良祐 大橋 信治	国立がんセンター 名古屋大学	気管支テレビ内視鏡 縦隔病変に対する超音波内視鏡的アプローチ	福田 守道
壇原 高	順天堂大学	食道超音波内視鏡を用いた縦隔腫瘍・肺癌における脈管浸潤の評価	
池添 潤平 名取 博	大阪大学 札幌医科大学	肺腫瘍、縦隔腫瘍の超音波検査 肺、縦隔腫瘍の超音波診断	
高島 力	金沢大学	Computed Radiography (FCR) を用いた肺癌の診断	河野 通雄
松本 満臣 中田 肇 荒木 力 W. R. Webb	群馬大学 産業医科大学 山梨大学 カリフォルニア大学	CT 肺・胸膜、胸壁 肺門・縦隔のCT MRIの基礎：信号強度決定因子について MRI of Lung and Mediastinal Tumors	
河野 通雄	神戸大学	肺、縦隔腫瘍のGd-DTPA enhanced MRI	
鳥脇純一郎	名古屋大学	肺野腫瘍病変の解析	佐久間貞行

演 者	所 属	演 題	座 長	
森 雅樹	札幌医科大学	肺野腫瘍病変の解析	入江 五朗	
山崎 克人	神戸大学	胸部のデジタル化X線写真の画像工学的評価—特に肺野腫瘍影並びに肺縦隔境界線について—		
吉田 祥二 金子 昌弘	高知医科大学 国立がんセンター	画像PACS PHDによる画像ファイルと早期診断	正岡 昭	
玉置 憲一 伊藤 元彦 正岡 昭 門田 康正	東海大学 国療宇多野病院 名古屋市立大学 徳島大学	胸腺の構造と機能 胸腺腫の形態 胸腺腫の合併症 胸腺腫以外の胸腺腫瘍		
土田 嘉昭 今井 純正	国立小児病院 札幌医科大学	縦隔腫瘍における腫瘍マーカー 嚢胞を伴う縦隔腫瘍における嚢胞内貯留液中CEA, CA 19-9, SCC, Elastase Iに関する検討		小松 作蔵
安光 勉 藤村 重文 池田 恢 西條 長宏	大阪府立羽曳野病院 東北大学抗酸菌病研究所 大阪大学 国立がんセンター	縦隔腫瘍に対する生検診断 縦隔腫瘍の外科療法 縦隔腫瘍の放射線療法 縦隔腫瘍の化学療法		
大倉 久直 伊黒 隆	国立がんセンター 仙台社会保険病院	癌化による糖鎖抗原の変化 腫瘍マーカーとしての血液関連抗原Lewis ^x およびシアル化Lewis ^x に対するモノクローナル抗体の応用	鈴木 明	
菅原 好孝	札幌医科大学	肺癌におけるCSLEX1モノクローナル抗体による血清学的および免疫組織化学的検索		
吉澤 正文 木村 雄二 廣田 正毅	東京医科歯科大学 横須賀共済病院 長崎大学	間質性肺炎における腫瘍マーカー CA 19-9の臨床病理 慢性気道感染における糖鎖抗原の意義	谷本 晋一	
第4回 1990年2月8-9日		代表世話人：漆崎 一朗		
癌とQuality of Life		方波見康雄他		
石谷 邦彦 栗原 稔 石川 邦嗣 古江 尚 赤沢 修吾 泉雄 勝 峠 哲哉 生越 喬二 小島 操子 F. J. Brescia	東札幌病院 昭和大学消化器科 東札幌病院 帝京大学内科 埼玉がんセンター 群馬大学第二外科 広島大学原医研外科 東海大学第二外科 聖路加看護大学 Calvary Hospital, N.Y.	QOLの概念 癌治療におけるQOLの評価 QOLの評価法 癌化学療法からみたQOL QOLからみた癌化学療法 QOLからみた癌手術 QOLからみた癌手術 QOLからみた癌手術 QOLと癌看護 Life quality, suffering and care of dying	小林 博	
平賀 一陽 並木 昭義 日置紘士郎 西平 哲郎 宮崎 保 江藤 澄哉 仁井谷久暢	国立がんセンター 札幌医科大学麻酔科 関西医科大学外科 東北大学第二外科 北海道大学第三内科 産業医科大学第一外科 日本医科大学臨床病理	癌患者の疼痛管理—経口薬物療法による疼痛管理— 癌患者の疼痛管理—非経口薬物療法による疼痛管理— 癌患者の栄養管理 癌患者の栄養管理 血液異常に対する治療 癌における高Ca血症について 症状コントロール—副作用対策を含めて—		漆崎 一朗 田口 鐵男

演 者	所 属	演 題	座 長
石垣 靖子 季羽倭文子	東札幌病院 ホスピスケア研究会	Palliative care unitにおける看護 Home care serviceにおける癌看護	
武田 文和 柏木 哲夫 樋口 和彦 近藤 元治 清水 哲郎 東海林邦彦	埼玉がんセンター 淀川キリスト教病院 同志社大学宗教心理 京都府立医科大学第一内科 北海道大学哲学 北海道大学法学	Psycho-oncologyとその周辺 世界におけるホスピスの現況 癌患者の心理と医師の心理 特別発言：医師の悩み 癌告知と Informed consent —倫理学の立場から— 癌告知と Informed consent —法学の立場から—	並木 正義 武田 文和
アルフォンス デーケン 並木 正義 方波見康雄 井口 潔 W. Breitbart	上智大学文学部 旭川医科大学第三内科 北海道医師会 九州大学名誉教授 埼玉がんセンター	Death education 医学教育におけるdeath education 医師会活動におけるdeath education 特別発言：人間の求めているもの Update in Psycho-oncology	
第5回 1991年2月5-6日 がん治療の変様と展望		世話人：井口 潔、内野 純一	
藤本 吉秀 飯田 太	東京女子医科大学 信州大学	甲状腺癌、とくに分化乳頭癌の治療 特別発言：甲状腺癌に対する拡大手術	江崎 治夫
阿部 令彦 野村 雍夫 妹尾 亘明	慶應義塾大学 国立病院九州がんセンター 倉敷成人病センター	乳癌の悪性度からみた治療対策の進歩 特別発言：乳癌：ホルモン療法 特別発言：Quality Of Life (QOL) からみた癌治療変遷と展望	泉雄 勝
成毛 韶夫 鈴木 明 山口 豊 早田 義博	国立がんセンター 札幌医科大学 千葉大学 東京医科大学	肺癌の外科療法 特別発言：肺癌の化学療法 特別発言：肺癌の外科療法 特別発言：早期肺癌に対する 光線力学的療法 (PDT)	末外 恵一
掛川 暉夫 森 昌造	久留米大学 東北大学	胸部食道癌の治療の変様と展望 特別発言：胸部食道癌手術の合併治療として の化学療法の変様とその治療成績	鍋谷 欣市
飯塚 紀文 秋山 洋 渡辺 寛	国立王子病院 虎の門病院 国立がんセンター	特別発言：食道癌の非治癒切除 特別発言：胸部食道癌の治療の変様と展望 特別発言：食道癌のリンパ系進展 の実態とリンパ節郭清の意義	
水本 龍二 羽生富士夫 小山 研二 二村 雄次	三重大学 東京女子医科大学 秋田大学 名古屋大学	胆道癌治療の進歩 特別発言：胆囊、胆管癌の拡大手術 特別発言：胆道癌の予後因子検討の意義 特別発言：胆道癌—診断—	土屋 涼一
斎藤 洋一 宮崎 逸夫 鈴木 敏	神戸大学 金沢大学 山口大学	膵癌の診断と治療 特別発言：膵癌の拡大手術 特別発言：粘液産生膵癌	佐藤 寿雄
岡本 英三 長谷川 博	兵庫医科大学 国立がんセンター	肝癌の変様と展望 特別発言：肝癌手術の変様と 展望—手術に関して—	戸部 隆吉
山田 龍作 内野 純一	和歌山県立医科大学 北海道大学	特別発言：肝癌に対するTAE、最近の変遷 特別発言：肝細胞癌の予後因子と治療	

演 者	所 属	演 題	座 長
西 満正 岡島 邦雄	癌研究所附属病院 大阪医科大学	胃癌の外科療法を中心に 特別発言：胃癌の外科療法を 中心に一括大手術	武藤 輝一
服部 孝雄 竹本 忠良 島津 久明	社会保険仲原病院 山口労災病院 鹿児島大学	特別発言：胃がんの化学療法 特別発言：胃がんの内視鏡的治療法 特別発言：胃癌—とくに早期 胃癌の治療を中心に	
安富 正幸 木村幸三郎 北条 慶一	近畿大学 東京医科大学 国立がんセンター	大腸癌手術の変様と展望 特別発言：直腸癌術前放射線療法 特別発言：大腸癌の手術治療	土屋 周二
総括討論 司会：井口 潔 討論：江崎 治夫、泉雄 勝、末外 恵一、鍋谷 欣市、土屋 涼一、佐藤 寿雄、 戸部 隆吉、武藤 輝一、土屋 周二、入江 五朗、渡辺 英伸			
第6回 1992年2月5-6日		代表世話人：阿部 弘	
脳腫瘍、頭頸部腫瘍の基礎と臨床			
野村 和弘 佐藤 武男	国立がんセンター脳神経外科 大阪成人病センター	脳腫瘍の統計と疫学 頭頸部がんの疫学	佐藤 武男
佐谷 秀行	テキサス大神経腫瘍学	神経線維腫症1型(NF1)遺伝子の 機能と神経分化との関連	長嶋 和郎
喜多村 健 古田 康 田矢 洋一 松田 道行	自治医大耳鼻咽喉科 北大耳鼻咽喉科 国立がんセンター研究部生物部 国立予防衛生研究所病理	神経線維腫症2型の遺伝子解析 頭頸部腫瘍とヒトパピロマウイルス 癌抑制RB遺伝子産物の機能 チロシンキナーゼ脳腫瘍	
星野 孝夫 峯浦 一喜 成瀬 昭二 中村 治	杏林大脳神経外科 秋田大脳神経外科 京都府大放射線医学 都立駒込病院脳神経外科	脳腫瘍の成長解析 脳腫瘍循環代謝のPET解析 脳腫瘍の代謝と循環MRS 悪性脳腫瘍におけるガングリ オシド研究とその臨床応用	高倉 公朋
杉田虔一郎 Alan Crockard	名大脳神経外科 The National Hospital	頭蓋咽頭腫の全摘出 Transmaxillary Approach to the Skull Base	菊池 晴彦
大西 英之 大浦 武彦 鎌田 信悦	大阪脳神経外科病院 北大形成外科 癌研究会癌研究所頭頸科	海綿静脈洞腫瘍へのアプローチ 眼窩内腫瘍 頭頸部癌手術におけるマイク ロサージャリーの応用	
奥野 哲治	足利赤十字病院診療放射線部	Endovascular Therapy of Carcinomas Involving the Skull Base and the Orbit- Initial and Long-term Results Concern- ing the Patient's Confidence	
辻井 博彦 松谷 雅生 井上 俊彦 大川 智彦	筑波大粒子線医学センター 東大脳神経外科 阪大集学放射線治療学研究部 東京女子医大放射線科	脳腫瘍の重粒子線治療成績 悪性グリオーマの放射線治療 口腔癌と上咽頭癌の放射線治療 頭頸部腫瘍に対する放射線治療	宮坂 和男
生塩 之敬 甲能 直幸 高倉 公朋	熊本大脳神経外科 順天堂大耳鼻咽喉科 東大脳神経外科	悪性脳腫瘍の化学療法：最近の動向 頭頸部癌に対する化学療法 脳腫瘍に対する免疫療法	犬山 征夫
吉田 哲憲	北大形成外科	顔面再建	大浦 武彦

演 者	所 属	演 題	座 長
細川 正夫 天津 睦郎 松浦 秀博	恵佑会札幌病院外科 神戸大耳鼻咽喉科 愛知県がんセンター頭頸部外科	食道再建とQ.O.L.—遊離空腸法と咽頭吻合合法の比較— 咽頭摘出と音声再建 口腔・咽頭再建における機能評価	
第7回 1993年2月6日 老化とがん化の接点を求めて		世話人：折茂 肇、小林 博	
武市 紀年 広川 勝昱 漆崎 一郎 松尾 光芳 近藤 元治 難波 正義 杉本 喜憲 木村 成道 折茂 肇 方波見康雄 井口 潔	北海道大学 都老人研 札幌医大・東札幌病院 都老人研 京都府医大 岡山大 動物遺伝研 都老人研 東京大学 藤女子大 九大・集財財団	老化とがん化—免疫生物学的立場から 老化に伴うがん転移様式の変化 老化とがん化—臨床学的立場から 酸化的ストレスと老化(基礎) 酸化ストレスとがん化・老化(臨床) 細胞の老化・不死化とがん化 不死化・老化を抑制するmot-1 がん転移抑制遺伝子と膜情報伝達系 老化の研究—世界の現状 生命倫理の立場から 死生学の立場から	長嶋 和郎 吉木 敬 宮崎 保 菊地九二三 新津洋司郎 森 道夫 葛巻 暹 藤永 恵 谷内 昭 中野 修 藤田 宏達
第8回 1994年2月5日 難治がん対策はいかにあるべきか？		世話人：垣添 忠生、末舩 恵一、兼元 敏隆、小林 博	
垣添 忠生 藤本伊三郎 森山 紀之 福岡 正博 成毛 韶夫 竜 崇正 二村 雄次 富永 祐民	国立がんセンター 大阪府立成人病センター 国立がんセンター 大阪市立総合医療センター 国立がんセンター 国立がんセンター 名古屋大学 愛知県がんセンター	難治がん—総論— 難治がんの罹患と医療の動向 肝・胆・膵がんの早期診断をめざして 肺がんの化学療法 肺がんの拡大手術と縮小手術 肝細胞がんの病態に応じた治療法の選択 胆嚢・胆道がんの手術療法 難治がんの予防	兼元 敏隆 田村 浩一 福田 守道 宮本 宏 久保 良彦 内野 純一 加藤 絃之 犬山 征夫
パネルディスカッション “難治がん対策はいかにあるべきか？” 司会：垣添忠生			
第9回 1995年2月10—11日 肺腺がん研究の最前線		世話人：川上 義和	
三宅 浩次 大島 明 祖父江友孝	札幌医大公衆衛生 大阪がん予防検診センター調査部 国立がんセンター研究所	肺癌の疫学—その動向とリスクファクター— 肺癌の疫学—タバコ対策 肺癌の疫学—検診	小林 博
下里 幸雄	国立がんセンター中央病院	粘液非産生性細気管支肺胞癌の発生、進展ならびに転移	阿部 庄作
瀬谷 司 四十坊典晴	大阪府立成人病センター研究所 札幌医科大学第三内科	肺腺癌の接着因子と補体 Peripheral airway marker(SP-A, SP-D, CC10)の腫瘍マーカーとしての臨床的意義	
土屋 永寿 高橋 隆 秋田 弘俊	癌研究所病理部 愛知県がんセンター研究所 北海道大学第一内科	肺腺癌における染色体異常 肺腺癌における遺伝子異常 肺腺癌の遺伝子異常の臨床的意義	下里 幸雄
西條 長宏 小倉 剛	国立がんセンター研究所 国立療養所刀根山病院	肺腺癌化学療法の現状と今後の展開 癌性胸膜炎治療の問題点	川上 義和
根来 俊一 磯部 宏 有岡 仁	大阪市立総合医療センター 北海道大学第一内科 国立がんセンター研究所	新薬を含む多剤併用化学療法 肺腺癌における薬剤耐性 プラチナ製剤の耐性機構	西條 長宏

演 者	所 属	演 題	座 長
村上 章	京都工芸繊維大繊維学部	アンチセンスDNA/RNA法の 癌治療への応用	貫和 敏博
西條 康夫	東北大学加齢医学研究所	アンチセンスオリゴを用いた 肺腺癌の増殖抑制と薬理動態	
大崎 匡	大阪大学第三内科	CEAを発現する肺腺癌を標 的とした遺伝子治療	
平家 勇司	国立がんセンター研究所	IL-2発現アデノウイルスベクターを 用いた肺癌遺伝子治療の基礎的研究	小倉 剛
瀬戸口靖弘	順天堂大学呼吸器内科	Co-stimulatory分子遺伝子導入 による肺癌遺伝子治療の試み	

第10回 1996年2月10日

2次原発がんとその予防

世話人：小林 博

海老原 敏	国立がんセンター東病院	2次原発がんの発生について 一頭頸部がんを中心に	末舛 恵一
福田 諭	北海道大学耳鼻咽喉科	頭頸部2次がん一日米の比較	海老原 敏
細川 正夫	恵佑会札幌病院	食道2次がんの臨床像	渡辺 寛
幕内 博康	東海大学病院外科	食道の2次原発がん—その予防と対策	小松 作藏
河原 正明	国立療養所近畿中央病院内科	肺がん患者の2次がん発生について	川上 義和
河田 聡	室蘭・日鋼記念病院外科	多重がん症例解析による2次がんの検討	内野 純一
若浜 理	市立札幌病院消化器内科	当科における重複がん症例の検討	内野 純一
西野 輔翼	京都府立医科大学学生化学	2次がんの化学予防	三宅 浩次
折館 伸彦	Anderson Cancer Center	レチノイドを用いた頭頸部癌 化学予防の基礎研究—レチノ イド受容体の重要性について	犬山 征夫
伊東 信行	名古屋市立大学	2次がんの予防—その正負の問題を中心に	北川 知行
細川真澄男	北海道大学医学部癌研究施設	抗がん剤による実驗的2次がんとその予防	井上 勝一
横崎 宏	広島大学医学部第一病理	2次原発がんと遺伝子不安定性	葛巻 暹

第11回 1997年2月7-8日

いまがんを考える—一診断、治療そして予防

診断=超音波装置(エコー)を用いたがん診断の実際とコスト

治療=臓器機能の温存と生存率の改善・予防=栄養とがん

世話人：加藤 紘之、犬山 征夫、斎藤 政樹

植野 映	筑波大学臨床医学系外科	乳がんの超音波診断	加藤 紘之
佐藤 重美	弘前大学医学部産婦人科	卵巣がんの超音波診断—特に超 音波による集団検診について	工藤 隆一
川口 智義	癌研究会附属病院整形外科	悪性軟部腫瘍の超音波診断	山脇 愼也
工藤 正俊	神戸市立中央市民病院消化器センター	肝がんの超音波診断の進歩	浅香 正博
山中 桓夫	自治医科大学附属大宮医療センター	胆膵系悪性腫瘍の超音波診断	今井 浩三
福田 守道	札幌医科大学名誉教授	特別発言	
仁尾 義則	島根医科大学第一外科	胃がんに対する術前療法	田村 浩一
有馬 純孝	福岡大学筑紫病院外科	消化器がんのNeoadjuvant Chemotherapyの現状	犬山 征夫
加藤 洋	癌研究会癌研究所病理部	腫瘍に対する化学療法の組織 学的効果判定の問題点	細川 正夫
大澤 俊彦	名古屋大学農学部応用生物科学科	抗酸化物質によるがん予防	谷口 直之
前田 浩	熊本大学医学部微生物学	植物食品の抗脂質ラジカルス カベンジャー活性とがん予防	細川真澄男
奥山 治美	名古屋市立大学薬学部	がん予防—まちがっていた食 物油脂の選び方	斎藤 政樹
Insu P. Lee	米国FDA	健康食品とがん予防について	石川 秀樹

演 者	所 属	演 題	座 長
第12回 1998年2月6-7日 世話人：今井 浩三、平田 公一、田村 浩一 いまがんを考える—診断、治療そして予防 診断=遺伝子診断と早期診断の最前線・治療=消化器がん治療成績の向上を目指して 予防=がん予防と将来展望			
工藤 進英	秋田赤十字病院胃腸センター	早期大腸癌の診断と治療—pit pattern診断の重要性—	今井 浩三
田原 榮一	広島大学医学部第一病理	胃がんの分子診断	細川真澄男
山中 英壽	群馬大学医学部泌尿器科	前立腺癌のスクリーニング	塚本 泰司
細川 正夫	恵佑会札幌病院	食道癌治療の現況	加藤 絃之
中島 聰總	癌研究会付属病院消化器外科	切除不能胃癌に対する術前化学療法	犬山 征夫
小平 進	帝京大学医学部第一外科	大腸がん治療成績の変遷と展望	平田 公一
福田 勝洋	久留米大学医学部公衆衛生学	食習慣からのがん予防	三宅 浩次
浅香 正博	北海道大学医学部第三内科	胃がんの予防は可能か?	新津洋司郎
富永 祐民	愛知県がんセンター研究所	将来予測からみたがん予防の展望	田村 浩一
第13回 1999年2月5-6日 世話人：阿部 庄作、工藤 隆一、加藤 絃之 いまがんを考える'99—診断、治療そして予防 診断トピックス・治療トピックス・予防トピックス			
江口 研二	国立病院四国がんセンター	小型肺癌の診断—現状と展望—	阿部 庄作
坂元 吾偉	癌研究会癌研究所乳腺病理部	早期乳がんの診断—病理と臨床—	荻田 征美
中村 祐輔	東京大学医科学研究所	がんの遺伝子診断	今井 浩三
清水 敬生	癌研究会付属病院婦人科	CDDPの連日少量投与方法—婦人科癌を対象として—	工藤 隆一
宮本 忠昭	放射線医学総合研究所重粒子治療センター	重粒子線がん治療の現況—特に頭頸部癌、肺癌、肝癌—	犬山 征夫
佐治 重豊	岐阜大学医学部第二外科	消化器がんに対する免疫化学療法	細川 正夫
森 秀樹	岐阜大学医学部第一病理	実験的癌からヒトのがん予防を考える	加藤 絃之
木原 正博	神奈川県立がんセンター臨床研究所	代謝酵素遺伝子からみたがん感受性	鎌滝 哲也
辻 一郎	東北大学医学部公衆衛生学	費用効果からがん対策を考える	井上 勝一
第14回 2000年2月11-12日 世話人：藤堂 省、細川 正夫、井上 勝一 いまがんを考える2000—その新たなる挑戦 診断・治療トピックス、予防トピックス			
三木 義男	癌研究会癌化学療法センター	家族性乳がんの遺伝子診断	今井 浩三
鎌田 信悦	癌研究会付属病院頭頸科	頭頸部進行がんに対する治療法—治療率とQOLの向上をめざして—	犬山 征夫
福田 護	聖マリアンナ医科大学乳腺・内分泌外科	乳がんと細胞周期制御因子	荻田 征美
加藤 治文	東京医科大学第一外科	肺がん最新診断・治療・予防	阿部 庄作
高橋 豊	金沢大学がん研究所腫瘍外科	がん治療の新戦略「Tumor Dormancy Therapy」—Must we kill cancer?—	平田 公一
大川 智彦	東京女子医大放射線科	がんの放射線治療—集学的治療における放射線の寄与—	晴山 雅人
山口 直人	国立がんセンター研究所	がん予防の実践の情報戦略	井上 勝一
中地 敬	埼玉県立がんセンター研究所	緑茶とがん予防	岸 玲子
岩尾総一郎	厚生省大臣官房厚生科学課	ミレニアムプロジェクトにおけるがん研究	飯塚 弘志
第15回 2001年2月10-11日 世話人：井上 勝一、荻田 征美、岸 玲子 いまがんを考える2001—予防・診断そして治療戦略 微小転移の診断と治療・治療の最新トピックス・予防トピックス			
山田 雄次	大鷲薬品創薬センター	Tumor dormancy therapyとしての血管新生阻害剤	井上 勝一

演 者	所 属	演 題	座 長
砂村 眞琴	東北大学医学部第一外科	微小循環からみた微小肝転移の診断と治療戦略	加藤 絃之
前原 喜彦	九州大学消化器・総合外科	消化器がんにおける微小転移の検出と治療への応用	平田 公一
窪田 和雄	東北大学加齢医学研究所	ポジトロン断層によるがんの転移・再発の診断	晴山 雅人
池田 正	慶應義塾大学医学部外科	乳がんに対するセンチネルリンパ節生検	荻田 征美
田中 紀章	岡山大学医学部第一外科	肺がんの遺伝子治療	細川 正夫
瀬戸 皖一	鶴見大学歯学部口腔外科	口腔がんと口腔機能	小浜 源郁
田島 和雄	愛知県がんセンター研究所	アジア・太平洋地域におけるがん予防への展開	岸 玲子
小早川隆敏	東京女子医大国際環境・熱帯医学	日本の国際保健医療協力の現状と課題	小早川 護
半田祐二郎	JICA国際協力専門員	スリランカにおける口腔がん対策：JICA歯学教育プロジェクトの役割	福田 博
第16回 2002年2月9-10日 世話人：平田 公一、加藤 絃之、岸 玲子			
いまがんを考える2002—予防・診断そして治療戦略			
がん治療の進歩Ⅰ・がん治療の進歩Ⅱ・がん医療の問題点			
高塚 雄一	関西労災病院外科	乳癌の化学療法—個別化への歩み	秦 温信
菊池 義公	防衛医科大学校産科婦人科	卵巣癌におけるシスプラチン耐性機序	藤本征一郎
西條 長宏	国立がんセンター中央病院	肺癌の分子標的治療	秋田 弘俊
下田 忠和	国立がんセンター中央病院	大腸がんの発育進展—病理学的見地から	細川 正夫
有吉 寛	県立愛知病院内科	抗がん剤適正使用のガイドライン (GL)	井上 勝一
杉原 健一	東京医科歯科大学外科	治療の個別化をめざした消化器癌化学療法	平田 公一
峠 哲哉	広島大原放射線医学研究所	バイオセラピーの今日・明日	加藤 絃之
高木 安雄	九州大学医療経営・管理学	国民医療費におけるがん治療費用と問題	飯塚 弘志
吉村 公雄	国立がんセンター研究所	がん生存者の推計	玉城 英彦
鎌野 俊紀	順天堂大学第一外科	リザーバーを用いた外来・在宅癌化学療法の有用性の評価	藤堂 省
濱島ちさと	聖マリアンナ医科大学予防医学	癌子防対策の経済評価	岸 玲子
第17回 2003年2月8-9日 世話人：秦 温信、平田 公一、岸 玲子			
いまがんを考える2003—予防・診断そして治療戦略			
海老原 敏	国立がんセンター東病院	頭頸部がん外科療法と機能温存	氷見 徹夫
平岡 真寛	京都大学腫瘍放射線科学	放射線腫瘍学における腫瘍標的治療の現状と展望	晴山 雅人
門田 守人	大阪大学病態制御外科学	肝細胞癌に対するInterferon併用化学療法の基礎と臨床	秦 温信
白尾 國昭	国立がんセンター中央病院	大腸癌の化学療法	細川 正夫
笹子三津留	国立がんセンター中央病院	胃癌における微小転移	平田 公一
中島 聰總	癌研究会附属病院	胃癌治療ガイドラインとEBM	加藤 絃之
福岡 正博	近畿大学医学部腫瘍内科	非小細胞肺癌の最新治療—分子標的治療を中心に—	阿部 庄作
松崎 道幸	深川市立総合病院	タバコ対策における医療機関・医療従事者の役割	佐野 文男
祖父江友孝	国立がんセンター研究所	喫煙と肺がんの関連の大きさに関する日本と欧米との違いについて	井上 勝一
中村 正和	大阪府立健康科学センター	外来や健診の場などを用いての効果的な禁煙指導について	岸 玲子
望月友美子	国立保健医療科学院研究情報センター	たばこ対策最前線—たばこ社会からポストたばこ社会へ	森 満

演 者	所 属	演 題	座 長
第18回 2004年2月7-8日 世話人：細川 正夫、阿部 庄作、長嶋 和郎			
いまがんを考える2004—予防・診断そして治療戦略			
塩崎 均 山岸 久一 小川 道雄	近畿大学医学部外科 京都府立医科大学大学院外科 宮崎県立延岡病院	食道癌の分子生物学的特性について 微小転移対策を考慮した手術々式の工夫 潜在癌細胞検出結果に基づいた 手術術式と手技の選択	細川 正夫 秦 温信 平田 公一
小川 一誠	愛知県がんセンター	外来化学療法	井上 勝一
一瀬 幸人 加藤 紘之 今井 浩三	九州がんセンター呼吸器部 北大大学院医学研究科腫瘍外科 札幌医科大学医学部第一内科	肺癌術後補助化学療法の現状と展望 癌外科のあり方をめぐって 抗体治療の現状と展望	阿部 庄作 藤堂 省 細川真澄男
鎌滝 哲也	北大大学院薬学研究科代謝分析学	CYP2A6は喫煙による発がん リスクを左右する	長嶋 和郎
横田 淳 石川 智久	国立がんセンター研究所生物学部 東京工業大学大学院生命工学研究科	DNA修復酵素の遺伝的多型と発がんリスク 癌の薬剤耐性と薬物トランス ポーターの遺伝子多型	鎌滝 哲也 谷口 直之
藤田 芳司	東京医科大学臨床プロテオームセンター	癌治療におけるファーマコゲノミクスと ファーマコプロテオミクスの現状と将来	仙道富士郎
第19回 2005年2月12-13日 世話人：晴山 雅人、細川真澄男、井上 勝一			
いまがんを考える2005—予防・診断そして治療戦略			
齊藤 史郎 米村 豊	東京医療センター泌尿器科 静岡がんセンター胃外科・腹膜播種科	前立腺癌小線源療法 Peritonectomyを用いた腹膜 播種の集学的治療	晴山 雅人 秦 温信
田中 桂子 瀧川千鶴子	静岡がんセンター緩和医療科 恵佑会札幌病院緩和ケア科	がん医療を支える—Palliative & Supportive Medicineがめざすもの— 保険診療内での緩和医療の実 際—民間医療機関の場合	細川 正夫 森本 裕二
佐藤 昇志 岡 正朗 小林 正伸 山田 雄次	札幌医科大学病理学第一講座 山口大学医学部消化器・腫瘍外科 北海道大学遺伝子病制御研究所 大鵬薬品工業機能研究センター	ヒト癌免疫治療研究の現状と課題 肝細胞癌の遺伝子診断 膵癌の新しい治療法の開発 産学連携における課題	細川真澄男 平田 公一 加藤 紘之 守内 哲也
飛内 賢正 高山 昭三 酒井 洋	国立がんセンター中央病院特殊病棟部 札幌医科大学第四内科 埼玉県立がんセンター呼吸器部	悪性リンパ腫の疾患特異的治療 胃癌の化学療法 進行再発非小細胞肺癌に対する化学 療法 現状と今後の展望について	井上 勝一 新津洋司郎 阿部 庄作
西條 長宏	国立がんセンター東病院	グローバルスタンダードからみた我 が国の臨床腫瘍医のあるべき姿	秋田 弘俊
第20回 2006年2月11-12日 代表世話人：平田 公一			
いまがんを考える2006—放射線療法、外来化学療法を中心に 放射線治療の進歩・外来化学療法の登場			
大西 洋	山梨大学医学部放射線科	I期非小細胞肺癌に対する定 位放射線治療の現状と将来	井上 勝一
白土 博樹 玉木 長良 杉村 和朗	北海道大学医学部附属病院放射線部 北海道大学大学院医学研究科核医学分野 神戸大学大学院医学系研究科放射線医学分野	動体追跡放射線治療 放射線治療におけるPET検査の意義 前立腺癌の画像診断：治療を 含めた最近の話題	山下 徹郎 塚本江利子 油野 民雄
根本 建二 森 武生 久保田哲朗	東北大学大学院医学系研究科放射線腫瘍学分野 東京都立駒込病院 慶應義塾大学病院包括先進医療センター	切除可能食道癌に対する化学放射線療法 大腸癌肝転移治療の展開 消化器癌補助化学療法の標準化と個別化	晴山 雅人 近藤 哲 平田 公一

演 者	所 属	演 題	座 長
野口眞三郎 池末 裕明 勝俣 範之 畠 清彦	大阪大学大学院医学系研究科乳癌内分泌外科 九州大学病院薬剤部薬品研究係 国立がんセンター中央病院第二通院治療センター 財団研究会有明病院外来治療センター	乳癌の薬剤感受性診断 がん化学療法における薬剤師の関わり 国立がんセンター中央病院における 外来化学療法の現状と問題点 外来化学療法における今後の戦略と改善	秦 温信 今村 雅寛 細川 正夫 新津洋司郎
第21回 2007年2月10-11日		代表世話人：細川 正夫	
いまがんを考える2007—補助化学療法の進歩、わが国におけるがん医療の将来			
藤内 祝 向井 博文 前原 喜彦 赤須 孝之	横浜国立大学大学院医学研究科顎顔面口腔機能制御学 国立がんセンター東病院化学療法科 九州大学大学院医学研究院臨床医学分野消化器・総合外科 国立がんセンター中央病院大腸外科	口腔癌のブレイクスルーを目指して—新しい超選択的動注化学放射線療法— 乳癌に対する術前化学放射線療法の効果と将来性 胃癌術後補助化学療法の現状と展望 大腸癌に対する補助化学療法の進歩	山下 徹郎 白土 博樹 平田 公一 高後 裕
奥坂 拓志 赤座 英之	国立がんセンター中央病院肝胆膵内科 筑波大学大学院人間総合科学研究科機能制御医学専攻腎泌尿器科学	膵がんに対する補助化学療法 浸潤性膀胱癌の膀胱温存治療は可能か？	近藤 哲 晴山 雅人
加藤 治文	東京医科大学外科学第一講座	非小細胞肺癌の補助化学療法についての動向	井上 勝一
牛尾 恭輔 土屋 了介 武田 康久 垣添 忠生	独立行政法人国立病院機構九州がんセンター 国立がんセンター中央病院 厚生労働省健康局総務課がん対策推進室 国立がんセンター	医用画像データベースの構築と世界への発信 がんの医療体制とがん専門医制度のあり方—意外に少なくてよい専門医の数— 我が国におけるがん対策の動きについて 地域がん診療連携拠点病院とがん対策基本法	細川 正夫 山下 幸紀 長瀬 清 飯塚 弘志
第22回 2008年2月9-10日		代表世話人：井上 勝一	
いまがんを考える2008—変わるがん医療・変えようがん医療			
横山 純吉 坂巻 壽 戸井 雅和 篠村 恭久 西尾 正道 朴 成和 椰野 正人 宮崎 勝 辻 一郎	栃木県立がんセンター頭頸科 東京都立駒込病院血液内科 京都大学大学院医学研究科外科学講座乳腺外科学 札幌医科大学医学部内科学第一講座 独立行政法人国立病院機構北海道がんセンター放射線科 静岡県立静岡がんセンター消化器内科 名古屋大学大学院医学系研究科腫瘍外科学 千葉大学大学院医学研究院臓器制御外科学 東北大学大学院医学系研究科公衆衛生学分野	頭頸部進行癌の臓器温存療法—超選択的動注化学療法— 成人急性骨髄性白血病治療の進歩 乳癌の分子標的治療について 消化管間質腫瘍 (GIST) に対する分子標的治療 ストロンチウム (Sr-89) による骨転移の疼痛緩和治療 大腸がん化学療法のUp Date—分子標的薬を導入して— がん手術のRCT—膵頭部癌に対する拡大手術vs標準手術 胆道ガン外科治療の進歩と今後の課題 がんと循環器疾患—危険因子・予防因子の共通点と相違点—	晴山 雅人 笠井 正晴 秦 温信 新津洋司郎 細川 正夫 高後 裕 近藤 哲 平田 公一 福田 勝洋

演 者	所 属	演 題	座 長
中園 直樹	神戸大学大学院医学系研究科 保健学専攻	国際保健医療協力—我々の出 来ること、公私にわたる経験 より—	小早川隆敏
藤田 公郎	元独立行政法人国際協力機構	日本の国際協力—ボランティア 活動で健康を—	寛 克彦
高久 史磨	自治医科大学、日本医学会会 長	望まれるがん医療	長瀬 清
第23回 2009年2月7—8日		代表世話人：近藤 哲	
いまがんを考える2009—がん治療最前線			
鎌田 信悦	国際医療福祉大学三田病院頭 頸部腫瘍センター	頭頸部癌治療、サイバーナイ フによる機能温存の試み	晴山 雅人
中村 清吾	聖路加国際病院アレトセンター乳腺外科	乳癌の標準治療2009—個別化 治療の時代を迎えて—	秦 温信
井垣 弘康	国立がんセンター中央病院食道外科	食道癌の補助療法	細川 正夫
横見瀬裕保	香川大学医学部呼吸器・乳腺内分泌外科	進行肺癌に対する導入療法・補助化学療法	近藤 啓史
永野 浩昭	大阪大学大学院医学系研究科 消化器外科学	進行肝癌に対する集学的治療 —外科治療を中心として—	平田 公一
高森 啓史	熊本大学大学院医学薬学研究 部消化器外科学	肺癌外科治療の有用性と限界	近藤 哲
渡辺 隆	国立がんセンター中央病院特殊病棟部	RI標識抗体療法	笠井 正晴
新地 洋之	鹿児島大学大学院医歯学総合研 究科腫瘍制御学・消化器外科	手術不能肺癌に対するTS-1 併用化学放射線療法	高後 裕
新川 詔夫	北海道医療大学固体差健康科 科学研究所	ゲノム解析によるヒト耳あか型 遺伝子の発見	有賀 正
浅香 正博	北海道大学病院	H. pyloriの除菌で胃癌予防 はどこまで可能か	篠村 恭久
吉田 晃敏	旭川医科大学	遠隔医療の現況と将来展望—がん診 断から生活習慣病の管理まで—	長瀬 清
第24回 2010年2月6—7日		代表世話人：西尾 正道	
いまがんを考える2010—診断学の進歩によるがん治療の新展開—			
近藤 啓史	(独)国立病院機構北海道 がんセンター	肺GGO病変とその臨床的 諸問題	大崎 能伸
渡邊 昭仁	恵佑会札幌病院耳鼻咽喉科・ 頭頸部外科	NBI (Narrow Band Imaging) 内視鏡を用 いた頭頸部表在癌の診断とその治療	福田 諭
永田 靖	広島大学大学院医歯薬学総合 研究科放射線腫瘍学講座	肺癌に対する体幹部定位放射 線照射 (ピンポイント照射)	白土 博樹
西村 恭昌	近畿大学医学部放射線腫瘍学 部門	頭頸部腫瘍に対する強度変調 放射線治療 (IMRT)	晴山 雅人
鈴木恵士郎	(独)国立病院機構北海道がん センター放射線治療科	新しい時代を迎えた放射線治 療	細川 正夫
小松 嘉人	北海道大学病院腫瘍セン ター・化学療法部	最新の大腸癌薬物療法	高後 裕
松村 保広	国立がんセンター東病院臨床 開発センターがん治療開発部	がん治療におけるDDS	磯部 宏
工藤 正俊	近畿大学医学部消化器内科学	肝癌治療アルゴリズムにおけ る分子標的治療の位置づけ	加藤 淳二
澤田 賢一	秋田大学大学院医学系研究科血 液・腎臓・膠原病内科学分野	慢性骨髄性白血病に対する分 子標的治療	笠井 正晴
光富 徹哉	愛知県がんセンター中央病 院・胸部外科	EGFRチロシキナーゼ阻害 剤による肺癌の個別化治療	秋田 弘俊

演 者	所 属	演 題	座 長
第25回 2011年2月12-13日		代表世話人：高後 裕	
いまがんを考える2011 —高齢化社会・疾病予防社会におけるがん医療—			
木崎 昌弘	埼玉医科大学総合医療センター血液内科	多発性骨髄腫に対する治療の新たな展開	加藤 淳二
福田 諭	北海道大学大学院医学研究科耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野	頭頸部腫瘍におけるナビゲーション手術	渡邊 昭仁
若林 剛	岩手医科大学医学部外科学講座	肝がんに対する低侵襲手術—腹腔鏡下肝切除	水口 徹
島田 安博	国立がん研究センター中央病院消化管腫瘍科消化管内科	大腸癌分子標的薬の“辛口”臨床評価	鳥本 悦宏
吉岡 弘鎮	倉敷中央病院呼吸器内科 兼外来化学療法センター	進行・再発非小細胞肺癌化学療法におけるS-1の役割(可能性)	大崎 能伸
中山 貴寛	大阪大学大学院医学系研究科乳腺・内分泌外科学分野学部	乳癌治療における経口フッ化ピリミジン系薬剤の新たな展開	平田 公一
Alex Yuang -Chi Chang	Jhons Hopkins Singapore International Medical Centre	The Changing Landscape in the Management of NSCLC: Implications of Personalized Treatment	秋田 弘俊
高巢 賢一	聖路加国際病院	高齢者のがん治療—前立腺がんを例にとりて—	塚本 泰司
鈴木 雅夫	医療法人社団爽秋会ふくしま在宅緩和ケアクリニック	在宅看取りについて	磯部 宏
櫻木 範明	北海道大学大学院医学研究科生殖内分泌・腫瘍学分野	子宮頸がんの最新の予防と治療戦略	森 満
田倉 智之	大阪大学大学院医学系研究科医療経済産業政策学	進歩する薬物療法と医療経済—国民目線によるがん治療の価値評価—	細川 正夫
仙道富士郎	山形大学前学長・名誉教授	発展途上国における医学研究に関する一考察—南米パラグアイにおけるJICAシニアボランティアの経験から—	高後 裕
第26回 2012年2月11-12日		代表世話人：福田 諭	
いまがんを考える2012 —最先端のがん医療をめざして—			
中川 和彦	近畿大学医学部内科学講座腫瘍内科部門	肺がん分子標的治療の最先端—個別化医療に向けて—	秋田 弘俊
佐藤 昇志	札幌医科大学医学部病理学第一講座	がん治療・予防のパラダイムシフトに向かって—免疫を中心に	高後 裕
柳本 泰明	関西医科大学外科	切除不能肺癌に対する化学療法	平田 公一
白土 博樹	北海道大学大学院医学研究科放射線医学分野	最先端研究開発プログラムによる分子追跡放射線治療装置の開発	晴山 雅人
藤谷 幹浩	旭川医科大学医学部内科学講座消化器・血液腫瘍制御内科学分野	大腸癌に対する内視鏡診断・治療の新展開	加藤 淳二
Tae Kyung	Department of Otolaryngology-Head and Neck Surgery, College of Medicine, Hanyang University, Seoul, Korea	Robotic Thyroid Surgery	福田 諭
遠藤 憲治 藤井あけみ	北海道保健福祉部健康安全局 北海道大学病院腫瘍センター	北海道のがん対策 今後の展望 パパやママががんになったら～子育て世代のがん医療のQOLを考える～	西尾 正道 磯部 宏

演 者	所 属	演 題	座 長
山本 律	医療法人社団リズミック産婦人科クリニック	EBMに基づいたリンパ浮腫治療：Complex Decongestive Physiotherapy, Phase1短縮化の試み	櫻木 範明
大橋 靖雄	東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻生物統計学	がん臨床試験デザインの新しい展開	森 満
北島 政樹	国際医療福祉大学	低侵襲・個別化消化器がん治療の展開	細川 正夫
第27回 2013年2月9-10日 代表世話人：秋田 弘俊			
いまがんを考える2013 一 個別化治療、医療経済をめぐって一			
酒井 洋	埼玉県立がんセンター呼吸器内科	肺癌治療におけるS-1の役割—2つの国内第Ⅲ相試験LETS STUDY & CATS TRIALから—	磯部 宏
勝俣 範之	日本医科大学武蔵小杉病院腫瘍内科	卵巣がん治療の最前線	加藤 秀則
水野 伸匡	愛知県がんセンター中央病院消化器内科	腫瘍術後補助化学療法—最近の話題	加藤 淳二
石黒めぐみ	東京医科歯科大学大学院応用腫瘍学講座	大腸がん補助化学療法の今～個別化を目指して～	高橋 昌宏
安藤 雄一	名古屋大学医学部附属病院化学療法部	遺伝子多型による抗がん薬の副作用予測	佐々木高明
Keunchil Park	Samsung Medical Center Sungkyunkwan University School of Medicine, Seoul, Korea	Evolving Standards of Care in Lung Cancers; Impact of Biomarkers	秋田 弘俊
浅香 正博	北海道大学大学院医学研究科がん予防内科学講座	胃がん予防の費用対効果	玉腰 暁子
祖父江友孝	大阪大学大学院医学系研究科社会環境医学講座環境医学教室	肺がん予防対策の経済評価	森 満
近藤 尚己	東京大学大学院医学系研究科疫学保健学講座	所得格差と健康格差	岸 玲子
長谷川敏彦	日本医科大学大学院医学研究科医療管理学教室	ケアサイクルから見たがん診療—医療のパラダイムシフトの典型	半田祐二郎
井伊 雅子	一橋大学国際・公共政策大学院	がんを持つ人のケアにおける家庭医の役割：国民の求める医療制度改革とは？	長瀬 清
第28回 2014年2月8-9日 代表世話人：高橋 昌宏			
いまがんを考える2014 一 外科治療の最前線、がん予防の社会評価一			
大幸 宏幸	(独)国立がん研究センター東病院食道外科	食道がんに対する集学的低侵襲性外科治療	細川 正夫
平野 聡	北海道大学大学院医学研究科消化器外科学分野Ⅱ	膵・胆道癌治療における外科手術の役割	高橋 昌宏
平川 和志	恵佑会札幌病院	ロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術の有用性	篠原 信雄
加藤 秀則	北海道がんセンター	腹腔鏡下広汎子宮全摘術の有用性に関する検討	高橋 昌宏
櫻井 晃洋	札幌医科大学医学部遺伝医学	がんと遺伝医療	平田 公一
松田 一郎	北海道医療大学元学長、熊本大学名誉教授	特別発言	

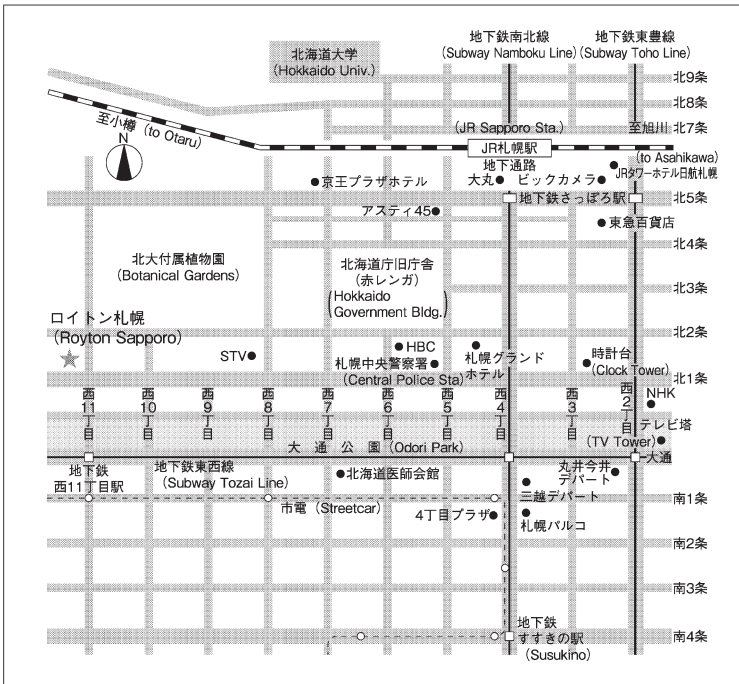
演 者	所 属	演 題	座 長
Kuo-Hsin Chen	Division of General Surgery, Far-Eastern Memorial Hospital, Taiwan	Robotic vs Laparoscopic Hepatectomy for Hepatocellular Carcinoma	武富 紹信
中川原 章	千葉県がんセンター	小児がん克服のための国際戦略	有賀 正
津金昌一郎	(独)国立がん研究センターがん予防・検診研究センター	がん予防：社会にとっての意義	浅香 正博
前田 浩	崇城大学DDS研究所	現今のがん治療薬のかかえる問題点	西尾 正道
武見 敬三	自由民主党 参議院議員	活力ある健康長寿社会作りとわが国のがん対策	長瀬 清
第29回 2015年2月7-8日		代表世話人：加藤 淳二	
いまがんを考える2015 ーがん薬物治療の最前線・今後の医療の方向と対策ー			
佐藤 康史	札幌医科大学医学部腫瘍・血液内科学講座	進行胃癌に対する集学的治療の進歩 ーDCS療法によるconversion therapyの可能性ー	高橋 昌宏
吉野 孝之	(独)国立がん研究センター東病院消化管内科	切除不能・再発進行大腸がんの薬物療法	小松 嘉人
小松 則夫	順天堂大学医学部内科学血液学講座	骨髄線維症の治療：JAK2阻害薬を中心に	豊嶋 崇徳
平賀 博明	(独)北海道がんセンター腫瘍整形外科	軟部肉腫に対する新規分子標的薬Pazopanibについて	鳥本 悦宏
山本 信之	和歌山県立医科大学内科学第三講座	肺がん化学療法への進歩と分子標的薬の役割	秋田 弘俊
山下 啓子	北海道大学病院乳腺外科	乳癌の生物学的特性と宿主要因	平田 公一
二川 一男	厚生労働省医政局	今後の医療行政の展望	細川 正夫
古川 俊治	自民党参議院議員	がん診療に関する医療政策の今後の方向性	小熊 豊
羽生田 俊	自民党参議院議員	今後の医療政策について	長瀬 清
藤森 研司	東北大学大学院医学系研究科医療管理学分野	National Databaseから見る全国の癌治療の状況	櫻村 暢一
第30回 2016年1月30-31日		代表世話人：平野 聡	
いまがんを考える2016 ー治療の多様性と集学的治療・高齢者がん医療の方向ー			
西尾 誠人	がん研有明病院呼吸器内科	免疫チェックポイント阻害薬	秋田 弘俊
清水 伸一	北海道大学大学院医学研究科放射線治療医学分野	多様化するがん治療の中でー放射線治療・粒子線治療	坂田 耕一
小寺 泰弘	名古屋大学大学院医学系研究科消化器外科学	StageIV胃癌における手術療法の役割	七戸 俊明
朴 成和	国立がん研究センター中央病院消化管内科	大腸癌化学療法	小松 嘉人
具 英成	神戸大学大学院医学研究科肝胆膵外科学	進行肝癌に対する独自集学治療の個別化について	武富 紹信
渡邊 昌彦	北里大学医学部外科	癌治療における内視鏡外科の現状と将来	近藤 啓史
小林 博	(公財)札幌がんセミナー	「がん年齢」が高くなってきた	長瀬 清
田村 和夫	福岡大学医学部総合医学研究センター	高齢者のがん治療	鳥本 悦宏
綿貫 成明	国立看護大学校看護学部看護学科老年看護学	高齢者がん医療の方向ー治療を受けるがん患者への看護の面からー	渡辺 由美

演 者	所 属	演 題	座 長
宮本 顕二 藤森 研司	北海道中央労災病院 東北大学大学院医学系研究科 医療管理学分野	特別発言：欧米に寝たきり老人がいないのなぜか DPC、NDBデータからみる我が国の癌医療の提供状況	細川 正夫
第31回 2017年1月28-29日		代表世話人：鳥本 悦宏	
いまがんを考える2017 ー新時代のがん診療と諸問題・子供へのがん教育ー			
藤井 努 西原 広史 松村 到 國頭 英夫 磯部 宏 鈴木 拓也 滝川 邦子	名古屋大学大学院医学系研究科消化器外科学 北海道大学病院がん遺伝子診断部 近畿大学医学部血液・膠原病内科 日本赤十字社医療センター化学療法科 KKR札幌医療センター KKR札幌医療センター KKR札幌医療センター	新時代のがん治療ー手術と集学的治療ー 網羅的がん遺伝子解析に基づくがん個別化医療の推進 造血器腫瘍における分子標的療法の中止の可能性 特別講演：サトルヌス 抗がん薬曝露対策に挑む	武富 紹信 田中 伸哉 鳥本 悦宏 近藤 啓史 高橋 将人
西山 正彦 湯浅 資之 染谷 正則 北野 滋久 岡本 勇 大場 大	群馬大学大学院医学系研究科病態腫瘍薬理学 順天堂大学国際教養学部グローバル社会領域 札幌医科大学医学部放射線医学講座 国立がん研究センター中央病院先端医療科 九州大学病院呼吸器科 東京オンコロジークリニック	児童・生徒へのがん教育 追加発言：がん教育におけるChild-to-Parentsアプローチ 個別化放射線治療を目指した、リンパ球RNA発現解析による有害事象予測 免疫チェックポイント阻害薬の開発とトランスレーショナルリサーチ 免疫チェックポイント阻害剤のチームマネジメント がんリテラシー教育の実践ーがん治療専門医としての新たな取り組みー	小林 博 白土 博樹 秋田 弘俊 本間 明宏 辻 靖
第32回 2018年1月27-28日		代表世話人：加賀基知三	
いまがんを考える2018 ーがん治療戦略の最前線とがん対策ー			
醍醐弥太郎 櫻井 英幸 坪井 正博 井上 彰 小松 嘉人 上野 秀樹 櫻井 晃洋 天野 慎介	東京大学医科学研究所附属病院抗体・ワクチンセンター 筑波大学医学医療系放射線腫瘍学 国立がん研究センター東病院呼吸器外科 東北大学大学院医学系研究科緩和医療学分野 北海道大学病院腫瘍センター 防衛医科大学校外科学講座 札幌医科大学医学部遺伝医学(一社)全国がん患者団体連合会	がんの分子病態に基づいたトランスレーショナルリサーチと創薬開発 粒子線治療の現状とエビデンス 肺 癌 領 域 に お け る Oligometastasis (外科医の観点から) がん治療と緩和ケア 切除不能進行・再発大腸がん薬物療法の変遷 大腸癌における外科病理の新たな進展ー本邦からの発信 小児AYA世代の遺伝性腫瘍がん患者の立場から見たがん対策	鳥越 俊彦 白土 博樹 加賀基知三 磯部 宏 加藤 淳二 武富 紹信 高橋 将人 秋田 弘俊

演 者	所 属	演 題	座 長
長瀬 清	(一社)北海道医師会	特別講演：北海道におけるがん対策	細川 正夫
堀田 知光	国立がん研究センター名誉総長	特別講演：がんにならない、がんに負けない、がんと生きる社会を目指す	小林 博
第33回 2019年1月26-27日		代表世話人：武富 紹信	
いまがんを考える2019 ―がんを取り巻く新しい取り組み―			
豊嶋 崇徳	北海道大学大学院医学研究院血液内科学教室	血液がん治療の最前線	鳥本 悦宏
光富 徹哉	近畿大学医学部呼吸器外科	肺がん治療の最前線	秋田 弘俊
西山 博之	筑波大学医学医療系腎泌尿器外科学	尿路上皮癌に対する個別化医療の現状と将来展望	舩森 直哉
青木 大輔	慶應義塾大学医学部産婦人科	卵巣癌におけるBRCA1/2変異状況とPARP阻害薬の現況	高橋 将人
海野 倫明	東北大学大学院医学系研究科消化器外科学分野	膵癌治療の最前線	平野 聡
前原 喜彦	九州大学名誉教授/公立学校共済組合九州中央病院	特別講演：外科学の進化	武富 紹信
佐瀬 一洋	順天堂大学大学院医学研究科臨床薬理学	連携が進むCardio-Oncology-国内外の現状と今後の課題-	辻 靖
梅田 恵	昭和大学保健医療学部がん看護専門看護師教育課程	地域緩和ケア ～がん体験者の第3の居場所～	前野 宏
山本 隆一	(一財)医療情報システム開発センター	クラウド時代における医療情報管理	田中 伸哉
中路 重之	弘前大学大学院医学研究科社会医学講座	特別講演：青森県の短命県返上活動とがん予防活動	長瀬 清
第34回 2020年1月25日		代表世話人：本間 明宏	
いまがんを考える2020 ―がん治療の最前線・新たな展開―			
水町 貴論	斗南病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科	急増するHPV関連中咽頭癌の現状と新たな展開	本間 明宏
辻 靖	斗南病院腫瘍内科	消化器がんに対する代謝拮抗剤の過去、現在そして未来	加藤 淳二
大崎 能伸	旭川医科大学病院呼吸器センター	肺癌治療のレボリューション	白土 博樹
高橋 由美	北海道がんセンターがん化学療法看護認定看護師	最新の抗がん薬治療の看護	高橋 将人
安藤 雄一	名古屋大学医学部附属病院化学療法部	高齢者のがん薬物療法ガイドライン	鳥本 悦宏
木下 一郎	北海道大病院がん遺伝子診断部	がん遺伝子パネル検査の実践と課題	田中 伸哉
細川 正夫	社会医療法人恵佑会	進行胸部食道癌の治療戦略と外科治療の成績について	平野 聡
大津 敦	国立がん研究センター東病院	産学連携全国がんゲノムスクリーニングプラットフォーム(SCRUM-Japan)でのがん新薬開発	秋田 弘俊
第35回 2021年1月30日		代表世話人：舩森 直哉	
いまがんを考える2021 ―ニュー・ノーマル時代におけるがん診療を考える―			
松浦 邦彦	釧路がん検診センター	北海道の対策型がん検診の現状とwithコロナ時代への対応	舩森 直哉

演 者	所 属	演 題	座 長
中村 聡明 高橋 将人	関西医科大学病院放射線治療科 北海道がんセンター	Withコロナのがん放射線治療 病院に必要とされる対策と課題 ～院内クラスター発生を経験して～	青山 英史 本間 明宏
佐々木純子 橋本 暁佳 木村 壮介	札幌医科大学附属病院医療安全全部 札幌医科大学医学部病院管理学 兼 循環器・腎臓・代謝内科学講座 日本医療安全調査機構	インフォームド・コンセントにおける看護師の役割 患者の意思が尊重されたDNAR指示を目指した当院の取り組み 基調講演：がんと医療安全～「医療事故調査制度」開始5年の経験から～	武富 紹信 辻 靖 田中 伸哉
大曲 貴夫 津金昌一郎	国立国際医療研究センター病院国際感染症センター 国立がん研究センター社会と健康研究センター	がん患者の感染症診療 基調講演：がんの原因としての感染症	豊嶋 崇徳 秋田 弘俊

会場周辺案内図



■地下鉄西11丁目駅：徒歩3分

札幌冬季がんセミナープログラム委員 (2020年4月～2022年3月)

委員長

秋田 弘 俊 (北海道大学大学院医学研究院腫瘍内科学教室教授)

委員

青山 英 史 (北海道大学大学院医学研究院放射線治療学教室教授)

鈴木 康 弘 (社会医療法人恵佑会理事長)

高橋 将 人 (国立病院機構北海道がんセンター副院長)

武 富 紹 信 (北海道大学大学院医学研究院消化器外科学教室I教授)

竹 政 伊知朗 (札幌医科大学医学部消化器・総合、乳腺・内分泌科教授)

田 中 伸 哉 (北海道大学大学院医学研究院腫瘍病理学教室教授)

辻 靖 (国家公務員共済組合連合会斗南病院腫瘍内科診療部長)

豊 嶋 崇 徳 (北海道大学大学院医学研究院血液内科学教室教授)

鳥 本 悦 宏 (旭川医科大学病院腫瘍センターセンター長)

本 間 明 宏 (北海道大学大学院医学研究院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室教授)

舩 森 直 哉 (札幌医科大学医学部泌尿器科学講座教授)

(50音順)

